

## 小学校の子どもたちの実態と評価

### 今の小学校に「集団」を学ぶ場はあるか

河合靖久

小学校から選挙が消えたとき

最近の、生活指導のサークルや学習会での話題です。中学校には、まだ「集団」を意識し、指導する場面は残っているのに、「小学校には、集団を学び自治能力を育てる機会がないのでは」と話題になりました。

確かに、ほとんどの小学校から、児童会の役員選挙が無くなって十数年が経ちます。

人間として生きるためには、他人との交わりの力を育てることが大切です。集団での体験を通して、自主性・主体性・自律性などを学び、高学年の資質としての意見発表や企画提案・運営能力などを育むことで、中学校以降の活躍も期待されるわけです。

最近、委員会なども「立候補・選挙」で決まることは希になりました。時間の確保が難しく、朝の会や帰りの会なども、連絡などで終わり意識的に友達との交わり能力を高める実践が進めにくくなっています。小学生に

- ・自治的能力などは必要ない
- ・理解不足なのに、競わせることは無理だ
- ・そんなことに時間は割けない
- ・個人が大切なので、特定の子に責任と権限を与えるのは良くない

等々の提案が6年生担任からあり、学級毎に委員を選出し、仕事を輪番でするのが機会の平等などと説明され、不十分な討議を経て決まりました。もちろん、

文部省(当時)の意図を反映した、管理職承認済みの提案で、当時すでに、職員会議も教職員の合意を尊重する雰囲気は失われつつあった中での出来事でした。

### 小・中の教員間のギャップ

学校や教職員間にも様々な課題がありますが、最近の親の生活も、昨今の雇用・経済事情で、家族や家庭の機能が根本から破壊されてきています。学校教育の前提として、地域の教育・福祉機関等の協力も得ないと困難の解決方向すら見えないのが現状です。

中学校の先生方にも、小学校の学級や児童会などの実情はあまり知られていないようです。教科担任制で毎時間先生が変わる中学校と、ほぼ毎時間子どもと付き合う小学校の違いが根底に存在します。

「どの先生に、いつ声を掛ければいいのかわからない」と、子どもや親の訴えも聞こえてきます。

中学の教師からは「小学校で何をしてきたの：こんなこともできないの：」と言われます。「あの子がなぜ中学で、崩れるの：」と小学校からの反論もあります。

一般論として、その子の個性や能力・家庭状況も知った上で学習を組み立てる小学校側に対し、生徒を自立

した存在として見る中学校での子ども観の違いもあります。

勉強の進め方も生徒理解もかなり違っている上に、目に見えぬ「受験」が重圧となっていることも感じます。中学・高校では、本来的に最も輝かしい思春期・青年期を約束された学校生活なのに、皮肉にも「受験と部活」で保たれている一面を無視できません。

### 学校教育を混乱させてきた行政の動向

子どもまで「儲けの対象」として見るおとな社会に学校が抵抗しきれなかったことも大きいと思います。少子化社会といえども、全国の小中学生は一千万人を超えています。しかも内容的に、将来の国民をコントロールできるという魅力もあるわけです。

行政の「通達や指導」で、学校が地域から遊離し、地域が学校を軽視する現象として現れました。

五十数年前の教職員の転勤(異動)での県教委と教職員組合の合意は、「同一校―七年、同一市町村―一五年以内で異動することでした。

このことは、管理員や調理員から全職員に影響を与え、同一校勤務の期間が縮まり、教職員全体の異動が

速くなりました。卒業生が訪ねて来ても知った顔に会えず、頼りにされない学校が現れました。

結果は、単身赴任や遠距離通勤・次の転勤に望みを託す教職員を増加させたのです。特に、管理職は2、3年間の異動で、落ち着きのない学校が増えました。

最近の学校教育の背景に、半世紀も前の「負の遺産」を感じるのには、私だけでしょいか。

「ゆとり」と「学力向上」のはざままで…

ここ二十年余の教育界の主な動きを見ても、学校現場が振り回される事が多かったのです。

1992年からの学校五日制への移行以来、体験を通して総合的な力を身につけるための、「ゆとり教育」が強調される一方で、「学びのすすめ」(文科省・02)に代表される、「学力重視」の対立する要求が同時に出現しています。

これまでに、生活科や総合の教科で、学校独自の実践も生まれました。それが十分な総括もされず未完成のまま、「学力向上」への方向転換が叫ばれています。

学力面では、「できない子も個性。教えてはならない…」と言われたり、「関心・意欲・態度も点数で評価」

する反面で、授業時数の確保が厳命され、県教委の点検が強められたりしました。中越地震で休んだ日数を、休業日返上で回復させた「熱心な」学校もあります。

「ゆとり教育」や学校五日制で授業日・時数と教科書の厚さが減り、「生活科の新設」で、1・2年生の理科・社会などが廃止。国語・算数・体育・図工などの時数も減り、1時間毎のステップは高くなつて、覚え込ませる・詰め込む場面が増えてしまいました。家庭へ持ち帰る「宿題」も増えたのです。

・漢字はふりがなを付ければ、習っていないなくても教科書に出る(一回仮名をふれば、次からは読めるものとして扱う…)以後、読み書きできない漢字の洪水状態…。  
・かけ算九九は、三年生から四年生にかけて教えていたのに、二年生の短期間で教える(理解よりも、必死に唱える)。

・理科では、具体的な工夫や操作の教材の削除(子どもの喜ぶ教材がなくなり、知識が細切れになった)。

・学ぶ内容もつながりがないため、関連づけて理解するより、記憶力の善し悪しが成績として評価され、詰め込まれた雑多な知識は、短期間で頭から抜けていきました。

せつかく習ったことも、日常的に使わなければ身についた方にはなりにくいのです。

そんなあわたたしさの中に、特別授業や英語教育が、学習時間を無視して割り込んだのです。時数確保の通達とも矛盾しました。矢継ぎ早な新方針の押しつけが、子どもも教師も混乱させ、学習から逃避する子ども増えたのです(いじめや不登校、自傷行為の増加等も…)。

中学校でも、英語の時数が減ったことで、日常的な語学に慣れる時間が学校から失われました。英語に限らず我が子の教育を学校に頼らず、外部に依存する親を増やしました。

多くの小学校では、子どもたちの係活動に、一人一役の形態なども導入され、係りの担当の子が休むと、たれもその仕事をしない無関心な事態すら生まれ、せつかくの異年齢集団の縦割り清掃でも、班長の六年生が一番らくな「筈係」を選び遊んでいる姿も見られました。

高学年の自然教室や遠足などでも、みんなで話し合い計画を立てて行動することより、設定された枠内で効率よく動かされることが多くなりました。

各種の行事にも、見栄え良く、一見、楽しく活発に、

いかに短時間で終えるかが、教師の指導力として賞賛されることにもなったのです。限られた時間の中で、子どもたちの話し合いや準備の時間を節約し、仕事をこなすための必要悪でもあったようです。

ゆとり教育と学力重視は、対立・矛盾を含みながら教育現場に同時進行の取り組みを求めたのです。

**小学校に数値目標・成果主義が導入されると…**

何でもかんでも数値化して、目標に掲げて実証することが学校に強いられています。

前出の「意欲・関心・態度を数値的に評価」する事で、子どもたちはどう変わったでしょうか。

中・高ではこの評定が「受験」に使われるので、意図的に目立つことを目指す生徒が増えました。小学校でも、一部に「積極的」な子も増えましたが、ここでも、方法を目的とした弊害が見られました。

関心を持って気づき積極的に取り組むことは、学習では大切な資質です。小学校では、授業中も学校生活全体を通して、感性も含めた人間らしさを育てようと努力しています。しかし、意欲や関心の評価が数字で示されると、評価のための努力が目的化していきまし

た。

様々な教育活動の結果として得られる意欲や関心・態度が点数獲得の目的となり、肝心の認識の高まりを阻害したのです。

昨年、春に実施の全国一斉学力テストにおいても、一部の学校ではテストのためのテストを繰り返しました。

従来の「知識」に関する問題より、「活用」に関する問題で点数が取れないとなると、そのためのテストを繰り返すこととなります。本来の出題の意図と目的を曲解し、テスト、テストで鍛えるのです。

子どもたちの学力以外の能力や態度・人格も含め、数値で判定し、評価・評定する動きも強まっています。あいさつの必要性や内容については触れる余裕はありませんが、「あいさつ運動」の例を紹介します。

「朝起きてから、何人にあいさつしたか？」を、数値目標に掲げ、数字で判定します。学級内や学級間の競争が学校中で繰り返されるのです。

初期の「あいさつ運動」は、朝の校門に教師(管理職)が立ち、子どもたちみんなに声を掛けるなど、教育的な意味を持っていました。中学・高校などで遅刻、服

装などの問題行動を克服し、人間関係の希薄さを乗り越える先進的実践でもありました。

しかし、企業の生産性向上のための理論・成果主義・業績評価(一部で破綻)で数値のみが強調されると、目に見える数字(業績)のみが強調され、運動そのものが目的化し、人を育てる本来の願いや目標を見失います。ましてや、それが育てる側の教職員に導入され、さらに、結果が勤務成績・勤務条件や給与へはね返る評価(考課制度)と連動すると、互いの信頼関係で成り立つ教育の場が壊されるのです。

教員評価を強引に主張する人々は、企業の生産活動と子育ての教育活動を、同質に見ています。納得と合意、相互の信頼を大切にしている教育の機能と矛盾すると思つのです。

学力問題に限っても、人間関係は無視できません。子どもたちの様々な考えや能力の違いは、子ども相互の思考を深めます。子ども相互の刺激や教え合いが、教師の力量を越えることすらあるのです。子ども集団の自治的な成長や発展に取り組むことは、学習の深まりや進化を保障することでもあるのです。

小学校に必要な評価は…

「意欲や態度」は、教育活動の総体として身につくものと考えられます。従って、これらの評価は、子どもたちの生き生きとした活動の姿や目の輝きなどで、教師が受けとめるものではないでしょうか。教師のまなざしや声かけの一言、励ましが、ひとり一人の成長を促すもので、数字の判定は「不必要」と考えます。

学校の主人公は子どもたちです。学校(教師)にとつて以下の2点の評価を大切にしたいと思います。

①子どもたちの知識・理解に関する評価

学習の達成度などは、授業後のテスト・アンケート・感想と共に、子どもたちの満足した表情や態度などをチェックしても知ることができます。

②教師の教材分析や授業の進め方に関する評価

教師が留意し、受けなければならぬ評価に、教材分析の深さや児童の実態把握と共に、授業の進め方や授業の質、子どもたちとのズレを知ることがあります。先生への通信簿などの実践がその方向を示しています。職場の忙しさが、そうしたことを忘れさせていないでしょうか。

人が人を評価し、評定を下すには、客観的で両者が納得できる内容や方法でなければなりません。子どもたちのために、協力し合える職場集団としての学校の力量が問われる事は言うまでもありません。

従来、各校毎に行われてきた「学校評価」の形式を参考に、管理職の学校運営や指導力への評価も含め、それぞれの教職員への希望や励ましと改善方向を出し合える教師集団の確立が、父母や地域からも信頼される学校を築き上げる近道なのではないでしょうか。

(かわいいやすひさ・所員)

